

安藤良雄先生の思い出

浅井良夫

三月のはじめ、留学の御挨拶に駿河台の病室を訪れた時、先生はいつもと変わらない笑顔で迎えて下さった。「専門の研究以外にも広くヨーロッパの文化を吸収していらっしゃい」との励ましの言葉に、「わたしも健康が回復したらまたヨーロッパを訪れてみたいですね」とつけ加えられた。私のイタリア滞在中は無理にしても、数年のうちにはヨーロッパの土を踏まれ、バイロイトで先生のお氣に入りのワグナーの楽劇を観賞されたり、ザルツブルグでモーツアルトのシンフォニーに再会される日は当然来ることと疑わなかった。先生御自身もその機会が一度ならずあると確信されている風であった。先生は日頃から誰に対しても不機嫌な様子や疲れた顔を見せられる事はなかったから、笑顔が心なしか弱々しく感じられたものの、病状がそれ程までに悪化していたとは思っても及ばなかった。そして、異国の地で先生の追悼文を記すことになろうとは……。

私は先生の体力を過信していた。名古屋で心筋梗塞に倒れた時に、生死の境をさ迷うほどの重態であったと後に病床で先生御自身から伺ったものゝ、一度危機を切り抜けてしまえばあとは順調に回復されるものと私は信じていた。入院が異常に長びいていたのも、義務感の強い先生が学長の激務に一日も早く復帰しようとなさる

安藤良雄先生の思い出

のを牽制するための病院側の措置とばかり思っていた。先生も御自分の体力には自信を持っておられた様子であり、科学者らしく近代医学の粋を尽した治療には深い信頼を寄せておられた。周囲の者も、先生の御家族や主治医など病状を熟知しておられた方々を除けば、最悪の事態は予想していなかったのではなからうか。

お元気な頃、先生は、「私は四、五時間寝れば十分な質なので、最近は公務やつきあいでは夜は余り研究ができないから、朝四時か五時に起きて執筆をするようにしています」とおっしゃっていた。大体人間は自分を基準にしてしか物事を判断できないものだから、私などは半信半疑で、多少の誇張はあるのではないかと思っていた。ところが、昨年の八月、先生の生活振りを目のあたりに見て、全く何の誇張もないことを知る機会を得た。

それは箱根での合宿の研究会の席であった。ごく少数数の研究会だったから、朝から晩まで先生と同じペースで数日を過す事となった。驚いたのは、スケジュールの過密さである。朝は九時に開会を宣言され、夜まで疲れた風も見せずに我々の報告を聞かれ、いちいちの報告に丹念な質問とコメントを加えられた。その間、休みと言えば食事とテレビのニュースの時間だけであった。少数数の気安さから、ニュースの時刻には討論の途中でも休憩にして必ずテレビのチャンネルを回されたのが印象的であった。経済史家といっても現代と直結した時代を専攻され、現状分析の専門家以上に経済・政治事情に通暁しておられた先生らしいと感じた。昼間は時間を設けて遠くへ散歩やハイキングをすることもなく、夜は博学多識の先生を囲んで談論は深更にまで及んだ。翌朝我々が眠い目をこすりながら食堂へ行くと、先生はすでに付近を散歩され、新聞にも目を通された後であった。

研究会の最終日には約三十歳も年下の我々の方が疲れ切って早く家へ帰って休むことばかりを考える有様であったが、先生は箱根に滞在中の東大で同僚であった方を訪問され、夕方には東京での会議に臨まれるとのことだ

った。「安藤先生の壮健さには全く感心をするね」と私が言うと、隣に居た私の友人の伊藤正直君（現、名古屋大学助教）が、「疲労が蓄積して突然病気になるって出るような事がなければよいが」と、いかにも先生の愛弟子らしい心配を口にしたのが今でも鮮かに記憶に残っている。心筋梗塞が先生を襲ったのはそれからわずか一か月半のちであった。

先生の学長に就任されてからの多忙さは一通りではなかった。学長室で先生にお目に掛る時にも、ひっきりなしに掛って来る電話でわずか十分か十五分程度の用談もしばしば中断される位であった。先生のスケジュールは文字通り分刻みであったようである。山積した仕事を先生はいとも易々とこなしておられる風に見えた。しかし、私も先生の健康に全く不安を感じなかった訳ではなかった。それは学長就任後、運動量が著しく減ったことであった。先生は日頃から、「私はなるべく車に乗らずに、小田急線や地下鉄を利用するようにしています。電車の中の広告を眺めるのも現実感覚を失わない事に役立ちますよ」とおっしゃっていたが、学長就任後は会議場から会議場を車で駆け回らねばならず、ゆっくりと電車通勤することも許されなくなった。若い頃はスポーツマンであった先生も、晩年の二、三年は体を動かす機会を失い、心臓に負担をかける結果となったのではあるまいか。

私が先生とはじめて面識を得たのは、先生が成城大学へ赴任されて来られた時であった。同じ日本経済史を研究する者として、先生の学界に於ける名声は熟知していたし、先生の著書は我々の必読書でもあった。しかし、学会の会場などで御姿を拝見することはあっても、あえて紹介を求めてお近づきになるには先生は余りにも大がすぎた。東京大学経済学部教授を停年で退官され成城大学教授に就任されたのは一九七八年四月であった。それ

安藤良雄先生の思い出

まで著書・論文を通じて私淑していた先生から約七年間にわたり私は直接に教えを受ける幸運に恵まれた。名目上は同僚であり、学長になられてからは私の上司であった訳だが、先生は弟子同様に遇して下さった。この間に先生から幾多の学問上の教えを受けることができた。

先生は座談の妙手であり、その博学多才、博覧強記振りで一緒に居る者を決して飽きさせせることはなかった。専門の経済史についての貴重な示唆も有難かったが、雑談の際に披露された諸々の知識や逸話は誠に興味津々たるものがあった。

先生は日本経済史でもとくに太平洋戦争期の経済史を深く研究された。この時期の研究はようやく最近になって他の研究者もその重要性に気付き、研究を手掛けるようになって来た分野であり、四十年も昔にこの分野に着目された炯眼には驚く他ない。学問上の業績とその意義については先生の親友であり、研究分野も近かった加藤俊彦先生が適切かつ十分な紹介文を本誌に寄せて下さっているので省かせて頂きたい。

ただここで指摘しておきたいのは、先生の太平洋戦争期統制経済の研究が御自身の戦時中の体験に直接基づくものだったという特異さについてである。先生は一九四二年一月に東京大学助手から徴兵で海軍応召となり、主計大尉として約四年間海軍省に勤務された。この間、海軍省の認可を得るために民間軍需企業から提出された臨時資金調整法関係の書類を整理したり、工場を視察するのが仕事だったそうである。いわば、戦時統制経済の中核に居られた訳である。先生は社会学者としての冷静な目で海軍に応召する以前から敗戦の必至を見抜いておられたようだが、目前を通過する書類から更にその確信を深められたに違いない。

戦後、これらの文書は先生にとって歴史の論理を解明するための史料となった。軍需工業動員法、臨時資金調

整法といつても我々は書物でそれを知るだけだが、先生は法律の内容はもとより、運用の實際、形式と実体との乖離などまで熟知しておられ、そのことは他の誰もまねのできない先生の強みであった。「最近の若い人が臨時資金調整法について書いているのを読むと、果して本当に法文を読んだのか疑問な場合がよくありますね」と時々先生は若い世代の研究者に苦言を呈しておられた。

先生の専門分野が御自分の深く干与された同時代史であったから、学問上の話でも臨場感があり、裏話やエピソードにも富んでいて興味深かった。

雑談の場合にも先生は学問・芸術上の話題を好まれた。先生は非常な記憶力の持ち主で知識は多様な分野に及び、また学者には稀な社交家であったので交際範囲は限りなく広がった。だから、どのような人にも共通の話題を提供する事ができた。御自身の知識をひけらかすことを好まれず、広い知識にも拘わらず術学的なところは微塵もなかった。むしろ、同席の人を退屈させたり、気まずい思いをさせるのを心配された。そこで、我々経済学部と同僚の席では自然、経済学や経済学者に関する話題が多かった。

残念なのは、これからもまたお聞きするチャンスはあると思つて、先生の話をメモしておかなかつたことである。改めて思い出そうとすると、余りにも断片的で筆に認めるには曖昧で不正確すぎる。幸いにして安藤先生御自身で記された自伝的回想「私の昭和史——時代と人と学問——」が、東大時代の安藤ゼミナル同窓会藤門会が編纂した還暦記念文集『藤文集』（一九八一年刊）に安藤先生の随筆文や同窓生諸氏の回想文と共に収められ、活字で残されている。歴史家的な丹念さで正確に事実を記録され、社会的背景の中に先生御自身の足跡を描かれた文学的な香りに満ちた素晴らしい文章である。しかし、そこに記されている以外にも幾つものエピソードを伺っ

安藤良雄先生の思い出

たのだが、それは記憶力の良い方々、記録をとっておられた方々に再現して頂くしかないだろう。ここでは残されたスペースで、私が直接に見聞した成城大学在職中の先生の思い出を綴ることにしたい。

「私が東大退官後、成城大学へ赴任しようと決意した最大の理由は、成城大学の上品な雰囲気が入ったからですよ」と先生は周りの人に度々漏らされていた。学者としての令名は大学の間に知れ亘っていたから、東大停年退官後の先生を是非迎えたいという大学は幾つもあったようである。先生は成城の雰囲気が入られ、成城を選ばれた。私から見ても、品が良く、社交的で、芸術を愛した先生に成城の雰囲気は良く合っていたように思える。

先にも触れたように、先生は類い稀れな社交家であった。先生の交際範囲は余りにも広すぎて一寸想像がつかない位であるが、恩師、友人、同僚、ゼミの卒業生からそれほど深い交際のない知人に至るまでつきあいのあった人々の各々について名前はもとより、学歴、職歴、役職名、姻戚関係も記憶されていたのは再三驚かされた。「安藤先生は『生き字引』『生き百科辞典』であるだけでなく、『生き人事興信録』でもある」と私は冗談半分に友人に話したものである。

先生は話し上手であると同時に聞き上手でもあった。先生の話題の豊富さと話術の巧みさは公開の講演会より、小さな会合の席で発揮されたように思う。先生は知的刺激に満ちたサロンの雰囲気の中でエスプリに富んだ会話を交されるのを好まれた。

話し上手は得てして聞き上手ではないが、先生の場合は両立していた。その聞き上手振りが学問上の業績として結実したのが名著『昭和政治経済史への証言』（一九六五～六六年）であることは衆目の一致するところだろう。

同書は当時現存していた政界・経済界・学界の「歴史の生き証人」たちに先生がインタビューした記録である。インタビューの対象となった重要人物は九十名にも及び、同書は今日では現代史の重要な史料の一つに数えられている。インタビューの際に相手から何を聞き出せるかは、聞き手がどの程度深い知識を持っているかに大きく左右される。如何に話術が上手でも知識が乏しければ枝葉末節の話しか聞き出せないし、知識があっても単に理論的な知識だと相手と話が噛み合わない。具体的な知識が豊富で、交際範囲も広い先生はまさに「歴史の生き証人」に壺を押えた質問をし、未公開の秘話を聞き出すのいうってつけの人物であった。その後、この類の書物は多々刊行されたが、他の本の著者には失礼乍らどうも安藤先生のインタビューほどの切れ味はないように思う。

聞き上手であることが先生の研究に役立った例は他にも挙げられる。晩年の先生と接して感心したのは、最近の学界の業績を实によくフォローしておられたことである。普通、学者は還暦を過ぎる年令ともなれば、主要な文献はともかく、若い研究者の研究動向には疎くなりがちである。あの激務の中で、どこに若手の論文迄目を通す時間があるのか、かねがね疑問に思っていた。そのうちに、同じ分野の若い研究者との論談の中で新しい研究潮流を探り当てられ、これはと考えられた業績をピック・アップして読まれるらしいことが判って来た。先生は学者として巢立った門下生を集めて研究会を開くのを楽しみにされ、門弟でない私もその末席に連なる光栄を得たが、このような席では先生は報告に耳を傾けられるだけでなく、細かい質問をされるのが常であった。先生は学問的な面で鋭い勘の持ち主であったから、学会、研究会、また単なる座談の中から容易に玉石を選り分けることができたのだと思う。

先生はまた人の遇し方を心得ておられた。いつだか覚えていないが、先生は私にこう語られた。「本人の聞い

安藤良雄先生の思い出

ていない所で決してその人の悪口を言っではいけない。若し後日それを伝え聞いたならば大変に嫌な気分がするものだから。」また別の折には、「人はそれぞれにプライドを持って生きているのだから、その人のプライドを傷つけるような言い方を決してしてはならない」と言われた。いずれも先生と二人で話していた時の言葉だと記憶している。とすると、その時は他人事のように聞いていたが、口の利き方を知らない若輩の私に対する御注意だったのではなかるうか。

先生の人柄を知る私にとっては、先生の御注意は単なる人づきあいの心得とは思えない。先生は相手がたとえ学生、若輩であっても丁寧に遇され、こちらが申し訳なく感ずるほど気を使われた。先生の社交術の背後には、誰も傷つけない、誰にも居心地の悪い思いをさせたくないという先生の優しさ、思いやりがあった。

先生の優しさはゼミナールの学生に対する接し方にもよく顕れていた。家庭的な雰囲気を大切にされ、しばしば合宿を行ったり、ゼミナリステンを自宅に招かれたりした。東大時代はなかなか厳しい指導をされたと聞くが、成城では御子息よりも遙に若い世代を相手に、専ら優しい先生だったようだ。もっとも、それは面と向って叱責をされたりはしないという意味での優しさで、学生に対して与えられた課題を見ると随分高い水準を求めているので驚いた記憶がある。学生にとって決して与し易い先生ではなかった。それにしても、研究室でのケーキに紅茶付きのゼミナールは他のゼミナールの学生にとっては文字通り垂涎の的であった。

学長時代の先生は、「大学の教員にとって研究は余暇に趣味で行うものではなく、教育と並ぶ重要な任務なのだから、成城大学を研究の場として充実させたい」との抱負を持たれ、研究条件の改善に並々ならぬ意欲を示された。しかし先生は決して教育活動を二の次に考えていらした訳ではない。毎年新しい研究成果を世に問うよう

教員でなければ、活き活きした講義が出来ないことは言う迄もない。日々の教育活動の慌しさを理由に研究活動に対して怠惰になりがちな我々若い世代への督励だったのだと思う。

「公務でよんどころない事情がない限りは講義を休講にしたい」と先生は日頃から講義を非常に大切にされていた。また、専門が近いので、先生のゼミと私のゼミとはしばしば共通テーマを掲げてゼミナール大会に参加した。大会の当日のゼミ討論は、ごく初歩的で幼稚なものであったにもかかわらず、先生はニコニコされながら辛棒強く学生の討論に耳を傾けていらした。大学院研究科長に就任されてから御多忙になっても、会場に顔を出され、学生の努力を労うという配慮は忘れられなかった。

温和、上品な雰囲気だけでなく、さらに深いところで先生と成城大学には共通する部分があった。先生は旧制成城高校の御出身ではなかったが、旧制成城の卒業生（同じ経済史分野では松田智雄先生や加藤俊彦先生）と共通するリベラリズム、教養主義を持っておられた。先生の自叙伝を読み、先生の育たれた家庭環境、研究者としての修業を積まれた学問的環境を知ると、その共通項の根拠がわかってくる。

先生の御祖父様は司法官から法政大学総長、枢密顧問官を勤められた方、御尊父は大蔵省の行政官で、先生は東京の文化的な上流階級の環境で育たれた。中学時代に日本史の勉強に興味を持たれると共に、昭和恐慌、「満州事変」期の深刻な不況と社会不安、軍靴の音の高まりの中で社会問題に対して関心を抱かれるようになった。高等学校は一九三四年の大飢饉直後の「窮乏の農村」地帯弘前を選ばれ、日本資本主義の矛盾を膚で体験されたのち、東京帝国大学で土屋喬雄先生の下で日本資本主義発達史の研究に励まれた。

一九一七年生れの先生は、大正デモクラシーの余韻が残っていた時代に青春を過された最後の世代だったと思

安藤良雄先生の思い出

う。先生の後の世代はそれこそカーキ色一色だったであろう。先生は岩波書店の売店で、思想弾圧により絶版となった山田盛太郎『日本資本主義分析』の最後の売れ残りを購入されたことを度々思い出話として語られたが、『資本論』や日本資本主義論争を十分に学ぶ機会は先生の世代を最後に閉ざってしまった。

先生の学問の基礎にあったのはマルクス理論の深い素養であった。思えば一九三〇年代前半に於いて日本の現実を直視しえたほとんど唯一の科学理論はマルクス理論であり、正義感に富み、学問を愛した当時の若い世代にとってマルクス理論は平和、理性、民主主義の象徴だった。先生が日本資本主義論争について語られる時、単なる過去の業績の偉大さに敬意を表するということにとどまらない、青春時代への愛惜の気持が籠められているように感じた。先生の学風は史料に語らせるといふ実証的立場であり、理論を以って史実を性急に裁断するような研究者に対しては非常に厳しかった。日本資本主義論争についてもそのセクシヨナリズム的な側面を批判され、講座派・労農派の一方だけに荷担することはなさらなかった。しかし、山田盛太郎氏の『日本資本主義分析』に対する先生の愛着は一通りではなかった。現在の大学生の国語力では漢和辞典の助けなしには一ページも読み進むことができないというこの難解至極な名著に悩まされた成城大学のゼミナリストも少なかった筈である。

一般的に言って、大正デモクラシー期に青春時代を送った世代と並んで最も民主主義に敏感な世代は戦後変革期に小学校教育を受けた世代ではないかと思うが、後者の世代と比較した場合、先生の思想は主張は同じでも、ニュアンスはどこことなく違う。印象的に表現するならば、戦後派のアメリカ流民主主義に対してイギリス流民主主義とも言えようか。先生は常に秩序を大切にされ、過激な行動や公式主義的な主張を嫌われた。その事と、リベラリズム、マルクス理論の素養とは先生の中であって矛盾するどころか、絶妙の調和を保っていたように思

う。先生の学説は斬新であったが、講義の口調、論文の文体には帝国大学教授の威厳が感じられた。

成城学園が大正デモクラシーの申し子であり、リベラルな都市の上流階級・中産階級の子弟の通う学校だったことを想起すれば、安藤先生の雰囲気と成城大学の校風との融和は偶然ではないのである。

「早く公務から解放されて研究三昧の生活を送りたい」と先生はしばしば多忙さを嘆かれながら、執筆を予定しておられた著書のプランを私に語られた。先生が学長として成城大学の運営と改革に情熱を傾けられたのは、職務に対する義務感以上に成城大学への愛情があったように思う。研究活動も、大学の仕事も半ばにして不帰の客となられた事は、我々にとって惜んでも余りあるが、先生御自身も無念だったに違いない。私個人にしても、幾多の恩義に何一つ報いる機会のないまま先生が他界された事は残念でならない。先生の残された御研究を若い同じ世代の研究者と一緒に受け継ぎ、発展させること、成城大学での教育に微力ながら力を尽すことが先生の遺志を継ぐ残された唯一の道だと思う。

(一九八五年十二月三〇日攔筆)